

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

März 2006

14

The German House in Naruto

発行日 2006年3月25日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 館長 田村 一郎
〒779-0225
鳴門市大麻町松字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: http://www.city.naruto.1g.jp/germanhouse/
e-mail: doitkan@city.naruto.1g.jp

ドイツ館「指定管理者制度」に移行

本年の4月から、ドイツ館にも「指定管理者制度」が取り入れられることになりました。「指定管理者制度」とは、公共施設の管理・運営を民間に委託するもので、「郵政民営化」にみられるとおり従来の官主導から来る非効率性を打破し、競争原理に立った民間活力を導入することで活性化を図ろうというものです。しかし多くの場合、主たる目的は財政負担の軽減にあることは周知のとおりです。

ことに文化施設にこうした制度を導入することの是非については、全国的にも議論があり、当然本来の文化的役割と効率性をどう調和させ、将来の展望を切り開いてゆかが課題となります。今回は「研究」と「国際協力・交流」部門は従来どおり市の担当とし、研究者としての館長とドイツ人の国際交流員などはそのままドイツ館に配置することになります。

施設の維持管理、入館者への対応と館内の案内、関連イベントの開催と情報の提供、清掃など周辺整備、関連物品の販売などが管理者の主たる責任となります。しかし最大の課題は、それらを「バンドー精神の継承とそれを柱とした国際交流の促進」というドイツ館の本来の任務とどう一体化し、発展させるかです。微力ながら、こうした課題を克服し大きく進展できる

よう、協力してゆくつもりです。

なお今回の「指定」の公募には、4件の応募がありました。慎重な審議の結果、これまでのミュージアム・ショップ経営の実績もあり、地元商工会の有志で組織する「ドム（独夢）有限会社」に決まりました。代表者の藤田徹さんに、決意をふくめたご挨拶をお願いしました。

ご挨拶

藤田 徹（ドム（独夢）有限会社代表取締役）

花の便りが聞かれる季節となりました。このたび鳴門市ドイツ館が民営化となりまして、この春よりドイツ館の指定管理者となりました。「ドム有限会社」の藤田徹です。宜しくお願いいたします。

「ドム（有）」は、平成13年、大麻町商工会青年部が中心となり、日独友好の輪を一層広げることを目的に、ドイツ館内にミュージアム・ショップをオープンしました。このショップでは、ドイツ物産品の紹介、販売等を行い、またドイツ文化の紹介や国際交流、経済交流等も行ってきました。

「ドイツ村公園を創る会」においてはイベント部長として、ドイツ館や商工会主催のイベント等の経験を積んできました。

これらの経験を生かして、鳴門市ドイツ館をたくさんの方々に紹介していくために、芸術文化活動や日独国際交流イベントの支援、ドイツワイン・ビール等の紹介や、絵画・ポスター・映像・写真等の展示を行います。

また鳴門市ドイツ館を利用して下さる方々へのサービスを考慮し、ドイツ館の休館日数の削減を行います。

私は、これからまた更にドイツ館の紹介やドイツ文化の紹介、また国際交流や経済交流を行い、地域の更なる活性化に努め、誰に対しても親切で優しくおらかな、善意に満ちたドイツ館作りを目指していこうと思います。

これからも皆様にドイツ館の利用とご支援等をお願いし、私の挨拶とさせていただきます。



チューリップとドイツ館
村沢義晴さん（鳴門市撫養町黒崎）撮影

最近の日本人からの板東関係寄贈品

これまで、『第九』里帰り公演などをきっかけとする元俘虜の関係者からの寄贈品につきましては、何度かお伝えしてきました。もちろん日本人の方々からもたくさんの品が寄せられており、ヴァイオリンや冷蔵庫、アルバムなどその一部は展示させていただいていますが、資料室に入ったままのものも少なくありません。そのうえ昨年夏ころから、いくつかの貴重な遺品が届きました。一つは当時、父が板東収容所で朝晩吹いていたという「ラッパ」で、もう一つはおじいさんが楽しんでいたという「ヴァイオリン」です。

「ラッパ」をお寄せくださったのは、徳島市北前川町の岡田光代さんです。板東収容所の管理に当たっていたのは、もちろん松江所長をはじめとする18名の所員です。けれど警備警察官出張所刊の「板東俘虜収容所沿革史」によりますと、そのほか板西警察署から巡査30名、徳島の第62連隊から憲兵隊8名と衛兵分遣隊56名が派遣され、警備を担当していました。衛兵分遣隊はほとんどが交代勤務でしたが、「喇叭手(らっぱしゅ)1名」は「毎日勤務」とあります。岡田さんのお父さんの「芦谷(後に坂本と改姓)満吉」さんが、その「喇叭手」だったわけです。青色にさびたラッパには、お父さんから繰り返し聞いたという、当時の収容所の様子を伝える「思い出」も添えられています。長



岡田光代さん寄贈のラッパ



乾昭憲さん寄贈のヴァイオリン

文ですので、その一部を紹介させていただきます。

「ヴァイオリン」をくださったのは、鳴門市撫養町黒崎の乾昭憲さんです。これまでドイツ館には、展示しております「地元の女性」(寄贈者については確認中)から寄贈されたヴァイオリンと、鳴門市撫養町北浜の坂井明次郎さんが西田義光さんから譲り受けたという一台がございます。このたびのも前の2台と同じズキのヴァイオリンで日本製ですが、小学校の先生をなさっていたおじいさんの「乾盛逸」さんが、俘虜解放時かその頃の即売会で入手したものだだろうとのこと。弦は切れていますがケースもしっかりして保存もよく、貴重な資料です。

これらの寄贈品以外にも、何人もの方からいまだに使っている「たんす」や「絵」などの情報が寄せられています。企画が詰まっておりますので年明けになるかもしれませんが、これまでの日本人からの寄贈品と所蔵品を集めた「企画展」を開きたいと思っています。もしお宅に板東収容所関係の資料がございましたら、ドイツ館までお知らせください。

◇

・次の文章は高齢の岡田光代さんの口述を、娘さんの坂本筆子(海部郡牟岐町辺川)が記録したものです。

父とラッパ (2005年8月4日)

(省略)

早速ですが、当時板東俘虜収容所でドイツ兵俘虜の起床時や集合時に吹いたラッパがございます。私の父は旧姓芦谷満吉と申しまして、明治27年4月に現在の海部郡牟岐町大字辺川に生まれました。

徴兵で蔵本に歩兵として招集されましたが、ほどなく俘虜収容所に配置されました。それまで父は故郷を離れたことがありませんでした。従ってそこで見聞きし体験したことは驚きの連続でした。毎朝ラッパを吹いてドイツ兵俘虜に起床時間を知らせることから始まり、ドイツ兵俘虜に食事を運んだりもしたようです。

食事の話を、よく父から聞きました。自分たち兵士はアワかヒエしか食べさせてくれないのに、ドイツ兵俘虜には真っ白な白飯をいっぱい出していたそうです。運ぶ時、炊きたての白飯のおいしいにおいがたまらなかったといいます。しかし食事を下げに行くと、そんな白飯をドイツ兵俘虜たちはあまり手をつけず残していました。「どうしてこんなまいもんを」と彼らを見ると、異国の単語で1言2言短く語り笑い返してくれるのですが、力のない笑みだったといいます。自分たち日本人と異なった色の瞳が見せた、哀しそうな何とも言えない表情が忘れられないといっておりました。

あいもかわらず上司は、彼らを大切な客として扱うように命令しました。そして来る日も来る日も白飯を炊き、父たちから見れば、正月や婚礼でも食べられないようなご馳走を出し続けたそうです。それは日本人の視点から考えた、精一杯のご馳走

だったのでしょうか。

(省略)

父がラッパを覚えたことは、画期的なことでした。それまではラッパはおろか、どんな楽器にも触れたこともなかったのです。もし俘虜収容所に配置されなかったら、ラッパなどと縁のない生涯だったと思います。

(省略)

当時、故郷の村は八十八ヶ所の路沿いにあり、おへんどさんを各家に泊める風習がありました。徴兵の時、父と一緒に北方の人が八十八ヶ所回りの途中、訪ねてきたのは第2次世界大戦が始まる前の初秋でした。家に上がるように勧めてもなかなか上がろうとしません。聞けば不治の病になり回っていると言うのです。(省略)

父はその人を無理やり家に上げて風呂に入れ、質素でしたが、あるだけの食事を出しました。そして夜遅くまで語り明かしました。その人にとっても俘虜収容所での日々は、見るもの聞くものがすべて真新しく人生のなかで輝かしい光を放っていたようです。人生の終着駅に近づいた今、その輝かしかった日々を共有した父に会いたくなり訪ねてきたのでした。それはその人自身が、自分の人生を肯定したかったのかもわかりません。

翌朝父は、その人に心ゆくまで休むようにと稲刈りに行きました。昼になって私たちが帰ってくると、既にその人は出発していました。入れ替わりに村で唯一の雑貨屋が来て、葡萄を1箱届けてくれました。なんでもその人から頼まれ、くれぐれもよろしく伝えて欲しいとのことでした。父はそれを返そうと、自転車で後を追っていきました。

(省略)

第2次世界大戦で私の弟が上海で戦死しました。父にとって、かえがえのないひとり息子でした。それ以来、父はラッパを吹かなくなりました。ラッパは納戸の奥深く影を潜めて、2度と父に息を吹き込まれることがありませんでした。

20年近く前納戸を建て直すことになり、40年ぶりに陽のあたる所に出しましたが、すでに父は亡くなり、ラッパ自身も変色し変わり果てていました。父の思い出が詰まったこの楽器を捨てるのは忍びがたく別の納戸に移して今日に至りました。

このようなのでよろしかったら、喜んでお届けさせていただきたいと思っております。

坂本筆子さんの「追伸」

晩年、祖父が言葉のひとつひとつを噛みしめながら、自分に言い聞かせるように語ったことを私は忘れないでしょう。「息子を思う時、板東の俘虜収容所で見たドイツ兵の哀しそうな目をふと思い出すことがある。かつて自分たちが言葉の通じないドイツ兵に必死で白飯を運んだように、息子も病に伏した異国の地で大事にしてもらったのだろうか。大切に扱われたと信じたい。同じ人間だから」と。



「ラッパ手」だった芦谷満吉さん（左側）

「大阪俘虜収容所」記念碑落成

去る2月18日に大阪市大正区の平尾亥開（いびらき）公園で、ここが「大阪俘虜収容所」跡地であることを示す記念碑の除幕式が行われました。青島戦後の1914年11月に日本にやってきたドイツ兵4,700名は、12ヶ所に収容されました。大阪はその一つで、当初は約760名がおりました。16年3月に火災があり、それを契機に17年2月に新設の広島湾の似島に移転しています。

この収容所が板東とかかわりが深いのは、徳島収容所の206名が1ヶ月足らずですが、日本での俘虜生活をこの地で始めていたことです。もう一つは、後に板東の分置所成就院(中寺)で過ごすことになるトロイケとツィンマーマン（パホルチック）もここから丸亀に送られ、そこを経由して板東に来ていることです。これらの人々を除く550名ほどが、2年3ヶ月ほどを大阪で過ごしたことになります。

当日は好天で300名くらいの方が会場を埋め、ドイツ総領事代行のE.ティートさんなどの挨拶に耳を傾けました。私田村も壇上に呼ばれましたが、ことに徳島収容所に移った一人に、『第九』の日本初演を指揮したヘルマン・ハンゼンがここにいたことを話しましたところ、関心を持っていただけたようです。もしもそのままハンゼンがここにいたら、大阪が『第九』初演の地になったのではとの新聞記事もあったそうです。

その後「アゼリア大正」で記念コンサートがありましたが、その会場には30枚ほどの大阪収容所関連の写真も展示されました。この写真のほとんどは当館所蔵のもので、西村区長さんや「大正区の歴史を語る会」の方々が来られて選んでいかれたも



「大阪収容所」記念碑落成式
左から2人目ティート総領事代行、3人目西村区長

のです。ことにこの収容所に関しましては、ハンブルク在住のフリー・カメラマン藤井寛さんが、奥さんから元俘虜のテオドル・エールハルトのアルバムを入手し、そのコピーをドイツ館に寄贈して下さっていました。これらの写真が、今回役立ったわけです。そのうえ大阪につきましては防衛庁中央図書館所蔵資料の中にも160ページほどが残っており、こちらも今回の記念碑作りに活かしていただきました。こうした資料がまとまって残っていることは珍しく、幸運だったと喜んでいます。

今回の大阪行きには、嬉しいおまけが付きました。翌日大正区の方々と旧真田山陸軍墓地のドイツ兵の墓にもうでました。大阪の陸軍病院で亡くなったゴルとクラフトという2人の墓碑が残っているのですが、これについてはまたの機会に書かせていただきます。

驚いたのはドイツ館から電話があり、藤井寛さんが大阪に向かってから時間を作ってくれというのです。藤井さんが大阪収容所の写真を届けてくださったのは25年前の1981年のことで、5年後にもう一度来られたようですが、それきり音信が途絶えていました。その方が、大阪で記念碑ができたときに来られたというのはまったくの奇遇です。私に予定があり短時間しかお話できませんでしたが、まだ57歳とのことでまたお会いするのが楽しみです。

なお藤井さんは、晩年のパウル・クライさんと親しくお付き合いしていたことをうかがいました。クライさんは板東収容所だけでなく第2次大戦でもシベリアでの俘虜生活を体験した人で、それをふまえて「世界のどこにバンドーのようなラーゲルがあったでしょうか、世界のどこに松江大佐のようなラーゲルコマンダーがいたでしょうか」という言葉が伝えられています。クライさんは、第2次大戦後にライポルトさんとともに板東を訪れており、交流の復活の一翼を担ってくれました。藤井さんにはクライさんのことをふくめてまたの機会に寄稿願うとして、今回はたまたまドイツでこの人に会われ、それを機縁に板東を訪ねられた宮城県角田市角田の佐々木さんの訪問記を掲載させていただきます。

ドイツ兵の慰霊碑訪問

パウル・クライに誘われて（2005年8月6日）

佐々木陽一郎（宮城県角田市）

気温は34度、目も眩むような暑さの中を歩いた。高松と徳島を結ぶ高德線の小さな無人駅から、北西2キロほど離れたドイツ館とドイツ兵の墓を訪ねるためである。舗装された道は、夏の太陽の熱を吸い取り、一步步くたびに汗が滴り落ちてくる。

板東駅に降りた乗客はわれただ一人、目指す道を歩いているのもただ一人、板東の住民はどこにいるのか、と思うほど物音一つしない静まり返った道を、パウル・クライさんの顔を思い浮かべながら歩いた。

クライさんとは、第1次世界大戦の時、ドイツの租借地「青島」を守備していたドイツ兵である。日本軍2万の兵力に包囲され、激しい戦闘を展開、衆寡敵せず5千人の仲間とともに降伏、「板東俘虜収容所」で3年余り捕虜生活を送った経歴を持っている。昭和60年10月15日、私たちは、文部省から教育事情視察でドイツに派遣された時、リュエデンシャイト市で、91歳になるこの老人と出会った。

この老人と出会うことがなければ、「板東俘虜収容所」の存在も知らず、関心を持つことも無く、めくるめくような真夏の昼下がりを汗を流して歩くこともなかったろう。

老人は日本の人道的処遇に深く感謝していた。当時の写真や所持品を大切に保存しており、市役所のホールに持参し、板東での数々の思い出を懐かしみながら見せてくれた。

あれから20年の歳月が過ぎる。共に固く握手をして別れたが、この世で再び会うことは無いとの思いは、別れた瞬間からあった。別れに際しクライさんは、はっきりした日本語で、「大日本帝国万歳」と絶叫したが、その声は今も^{じだ}耳朶に残っている。

大日本帝国は、昭和20年8月15日の敗戦によって消滅したが、クライさんの心の中には、当時の日本人々との触れ合いによって生まれた感謝の心が生きており、思わず叫んだものと思われる。

ドイツ館を見学し終えたので、館の外の丘に建つベーターヴェンの像を写真に撮り、20年間念じ続けてきたドイツ兵の慰霊碑のある収容所跡地に向かった。館の受付係の女性に場所を聞いたら、ドイツ館から見通すことができない右前方に位置していると言う。

正午はとうに過ぎて午後1時も近く、板東発2時5分も気になる。右歩道を歩いて行くがすれ違う人は全く無く、人家も無いので道を聞くことも出来ない。どこで右に折れるか、その先に果して慰霊碑があるのかなど、思案しながら歩いた。平坦な地形の所々に人家が点在、車がやっと通れる丁字路や十字路では、不安にかられながらドイツ兵の慰霊碑の前に立つことだけを念じていた。すると前方に木立が見え、樹齢40年は経つ樹木

の茂る林となり、ドイツ兵の墓まで200メートルの小さな手製の表示板があった。知らず知らず近づいていたのは、クライさんの魂の導きに思えた。

緩い坂道を100メートルほど登っていくと、一見してそれと分かるドイツ兵の慰霊碑が2つ建っていた。古い慰霊碑は、クライさんたちが大正8年にドイツに帰るときに建立したものであり、それより大きい慰霊碑は昭和51年に建てられた全国の収容所で亡くなった人々のものだ。

故国ドイツに帰ることを願いながら、異国の土となった兵士たちの御霊と無事故国に帰った後、老いを迎えてこの世を去っていった「板東俘虜収容所」での生活体験者である全ドイツ兵のため、シラーの詩「An die Freude」を朗読、その冥福を祈った。碑の周囲には人影もなく、共に弔うかのように蝉が鳴いていた。

高松市では、20年前に私と一緒にクライさんと会った視察団の仲間が待っている。

板東駅から高松ゆきの電車に乗ったのは、降りた時と同様われ一人であったが、「二人同行」の言葉があるように、鳴門市ドイツ館見学とドイツ兵への墓参りは、生きていれば111歳になるクライさんとの二人同行の墓参であったと思っている。

リューデンシャイト市で会った時、「板東には帰国してから2度訪問したことがある」と言っていたから、今度で3度目とクライさんは数えてくれるであろうか。



1970年に「バンドー」を訪れたクライさん（左側）

いよいよ『バルトの楽園』ロケ村オープン

副館長 中野 正司

昨年11月から12月まで約40日間にわたって撮影に使われた東映映画『バルトの楽園』のロケセットが、いよいよ3月21日から『バルトの楽園』BANDOROケ村～^{かんき さと}歡喜の郷～として一般公開されます。

このロケでは、出目昌伸監督の指揮のもと、主演の松江豊寿所長役の松平健さんや、ドイツを代表する国際的俳優ブルー

ノ・ガンツさんをはじめ、高島礼子さん、阿部寛さん、市原悦子さん、國村隼さん、大後寿々花さんなどの豪華俳優陣、約100名の映画スタッフ、ドイツ兵役の外国人エキストラ100名が、地元のエキストラやボランティア延1600名の支援を受けて、熱演を繰り広げました。

そこでは、約1万㎡の敷地に、収容所内前の街並み、正門、バラック(兵舎)や管理棟、酒保など合計33棟もの本物そっくりのセットが建ち並び、映画に一層の迫真感を与えています。

これらをそっくり残したBANDOROケ村では、映画に関する展示やメイキングDVDなども放映され、セットの一部では撮影時に使われた小道具なども再現して、映画の模様や大正時代の板東俘虜収容所が体感できる上、映画グッズ、ドイツ製品、地場産品など、ここならではの買い物も楽しめます。

また、ドイツ館やロケ村を見学してその背景や歴史を知り、6月17日日独同時公開予定の映画を見ると、最高の感激が味わえると思います。ぜひお越しください。

映画の世界をあなたも体感してみませんか？

バルトの楽園

BANDOROケ村

～ 歡喜の郷 ～

映画オープンセット一般公開

平成18年 **3月21日** 火曜 **オープン**

◆施設種別協力金
大人 500円 小学生 200円

◆開館時間
9:30～17:00 年中無休

TEL:086(306)1187



「道の駅」6月に完成予定

昨秋から工事にかかっていたドイツ館前の「道の駅—第九の里」が、しだいに姿を現してきました。賀川豊彦記念館横の駐車場はすでに舗装がすみ、現在は県道に添った側溝の整備中です。ドイツ館側はドイツ風のしゃれた「トイレ」と、その脇に設置される「観光情報端末機」のコーナーがほぼ完成し、トイレは4月頃から使えることになりそうです。

「駐車場」では、バス停などが置かれる木製の「交通島」（正式にはこう呼ぶのだそうです）2本の工事にかかっています。これと並行して西側に180平方メートルほどのコンクリートの土台が作られています。これはお土産と軽食を扱うサービス棟です。懸案の食事する所がほしいとの要望に応えることもあって、一昨年国の「登録文化財」となりました元「バラック」の一つを活用することにしました。

やや遅れぎみですが、6月の『バルトの楽園』の公開までには間に合わせたいと、担当者も作業を早めているようです。この「道の駅」作りには、われわれもその一員である「ドイツ村公園を創る会」も相談にあずかってきました。県道12号線からやや遠くどれだけ利用者があるか心配ですが、サービス棟を魅力あるものにするなど工夫をこらすことで、有意義な施設にしたいと思っています。

なお工事が完成するまでの間、ドイツ館の駐車場はほとんど使えません。ご不便でしょうが、向かい側の「第2駐車場」をご利用ください。



工事中の「道の駅」トイレとサービス棟

これからの行事予定

4月	1日—23日	花と人形の工芸展
	16日	ドイツのイースター祭り
	23日	ドイツ館写真撮影会
5月	1日—14日	ドイツ・ワールドカップ サッカーポスター展

	3日・4日	ドイツワイン祭り
	13日	ドイツのサッカー講座（第1回）
	20—6月25日	『バルトの楽園』記念展
6月	3日	ドイツワインの夕べ（会場 アド・イン）
	10日	ドイツのサッカー講座（第2回）
7月	1日—30日	企画展「徳島・板東俘虜収容所長 松江豊寿の実相」
	9日か16日	シンポジウム 「徳島・板東俘虜収容所長 松江豊寿を探る」
	15日	セタコンサート
8月	6日—26日	『バルトの楽園』子ども絵画展
	13日・14日	ドイツビール・ワイン祭り
	20日（?）	あれから61年 第12回ピースコンサート in 鳴門

『「青島戦ドイツ兵俘虜収容所」研究 第4号』原稿募集

- ・締め切り 2006年7月31日
- ・投稿字数 3万字（400字詰め原稿用紙75枚）を一応の限度とします。
- ・様式 A4サイズ横書きで40字×36行とし、字体は「MS明朝」で10.5ポイントに揃えます。
- ・協力費 10ページ（1ページ1,440字）まで3,000円、20ページまで4,000円、21ページ以上5,000円とします。投稿者には10部まで無料送付、それ以上については1部300円でご購入願います。
- ・送付先 〒779-0225 鳴門市大麻町松
鳴門市ドイツ館内 田村一郎
Tel 088-689-0099 Fax 088-689-0909
もちろんメールでも結構です。
doitukan@city.naruto.1g.jp

編集後記

昨年度は「日本におけるドイツ年」ということで、さまざまな行事に追いまくられました。4月からは「指定管理者制度」のもとで、新たなスタートを切ることになります。これまでご協力・ご支援くださった皆さん、今後もよろしく見守ってください。

今回は岡田さんと佐々木さんから、心のこもった文章をいただきました。ドイツや板東にかかわる情報をお持ちの方、ご遠慮なくご寄稿ください。随時、紹介させていただきます。

田村